

2019 年度

NGO スタディ・プログラム最終報告書

提出日	2019 年 3 月 5 日	
氏名	高橋 郷	
所属団体(正式名称)	特定非営利活動法人 Little Bees International	
派遣タイプ	実務研修型 / <u>研修受講型</u>	
研修国	アラブ首長国連邦	
受入機関名	UNITED NATIONS HUMAN SETTLEMENTS PROGRAMME	
研修期間	2020 年 2 月 6 日～2020 年 2 月 14 日	
研修テーマ	世界的に都市への人口集中が進む中、貧困、環境、健康、人権等の問題も都市部に集中し複雑化を増している。アーバンソリューションに向けた知見・ネットワークの強化のため、WUF10に参加する。	

1. 導入（研修前の問題意識）

世界的に都市部への人口集中が続いている。国連の報告では、アフリカ地域の都市化率は、2010年時点では50%以下だが、都市への人口集中の速度は先進国を上回っており、2050年にはアフリカでも60%近くまで都市化が進むと推計されている。それに伴い深刻化してきたのが、住環境の悪化や交通渋滞の問題であり、地球環境面でも負担が大きくなっている。とりわけインフラ開発が進まないアフリカにおいて都市化の問題は、膨張するスラム地域を生み出し、治安の問題、廃棄物管理の問題、衛生・健康の問題とそこに暮らす人々にとって看過できない状況を生み出している。そうした都市化と取り残された地域の支援を行うことを目的として、弊団体 LBI はナイロビのゴミ捨て場から派生したスラム・コロゴッチョで、地域の環境改善、廃棄物管理の適正化や HIV ケア、そして教育活動と包摂的な開発のための活動をコミュニティの住民参加型で6年以上現地に根差した形で行ってきた。2018年には、環境省と JICA がイニシアティブをとる「アフリカのきれいな街プラットフォーム」にも参画し、日本の Fukuoka 方式による廃棄物管理プロジェクトを進める UN-Habitat と現地で意見交換も行い、今回の WUF10 への招待へと繋がっている。そうしたことを踏まえ、今回の WUF10 では、市民社会として複雑化する都市化の問題を SDGs の文脈でどう理解しソリューションを求めていくのか、そのアプローチの在り方についてと、社会的包摂、レジリエントそして持続可能な都市を実現するための礎として、都市化と文化、イノベーションをつなぐリンケージについて考察を深めシナジーに結び付けるとともに、今後のアフリカの都市スラムでの活動の方針の強化と、ボトムアップのアプローチで社会的包摂の視点をより明確にするため多文化主義に基づいたコミュニティの創造につながるアイデアを獲得したい。

2. 本文（研修実施内容）

10 度目を迎えた World Urban Forum では、次の3つを主要な開催目的としてあげている。

1. セクターの垣根を越えて、都市化の問題を認識し共通化する。
2. 持続可能な都市の発展に関わる知識の集積を図るため、開かれた包摂的な対話と優れた先進事例、政策をシェアするための場を提供する。
3. 持続可能な都市化を進展するためのパートナーシップを進める。

この3つの目標に沿って、世界の都市化がもたらす複数の課題、貧困、健康、環境、人権等の様々な、グロブな事例がショーケース的に示され、ワークショップも開催、169 か国以上から 13000 人以上が参加した。開催されたセミナー、ワークショップ等の数も 500 を超え、世界の都市化の問題を議論するにふさわしい内容となっている。主なものだけでも、全体会合での主要なステークホルダーによる都市アジェンダの議論、ハイレベルセッションとして設けられたダイアログセッション、行動を主眼にした主要な都市課題を議論するためのラウンドテーブル、ホストの国連ハビタットが主催した様々なアクターによる特別セッション、より包摂的で、より持続可能なスマートビジョンを得るためのサイドイベント、参加者同士が知見を交換しパートナーシップを深めるためのネットワーキングイベント、都市化の特定の課題にフォーカスして解決のためのアイデアとスキルを磨くためのトレーニングセッション、国連機関の協働によるワン国連セッション、世界の各都市の声をダイレクトに届けるヴォイスセッション、SDGs を達成するためのグッドプラクティスを共有する SDGs セッション、都市化の課題を著名な思想家を招いて哲学的思索的に探索するアーバントークが、アブダビの広大なエキシビジョンセンターで6日間にわたって繰り広げられた。

主要なテーマの一つ、持続可能な変化を促すための新しいアーバンアジェンダについては、都市は、SDG 1 貧困の終焉、SDG8 包括的かつ持続可能な成長、SDG10 不平等の是正、SDG12 持続可能な生産と消費の確立、SDG13 気候変動対策、において重要な役割を果たすことが確認された。中でも昨年の消化不良の内に終了した国連気候変動会議 COP25 の議論を受け、パリ協定の目標を達成するために都市が果たさなくてはならない役割について、様々なセッションで議論され、脱炭素社会を目指すうえでのイノベーションの大

切さと、それを促すための投資の必要性に焦点をおいた議論もアーバンソリューションの要のテーマとして広く取り上げられ、都市スラムにおけるコミュニティ参加型の気候変動適応対策の活動を行う、弊団体の活動にとっても啓発活動を促進する上でのコストの削減につながり得る、都市化のテクノロジーの進展に関する議論は参考になった。また、都市コミュニティが本来保持していた伝統的な知識システムが、グローバル化に代表される近代化と技術革新によって、脅威にさらされているとの指摘も会場からあり、個々の社会、コミュニティがもつ特殊性、伝統的なシステムをグローバル化のただなかにある都市の持続可能な発展のためにどう融合させていくべきか、について考えさせられるとともに、開発におけるオーナーシップの課題に改めて向き合うことができたのは、8年目を迎え活動がともすると慢性化しかねない、弊団体の活動を考える上で良い機会ともなった。

都市の発展において伝統的な文化とイノベーションにレバレッジを効かせることは、都市の創造性とキャパシティ、そしてスキルの習熟度によって大きな差が生じるため、依然として多くの都市においては難しい課題となっている。その隙間を埋めることができるのは、柔軟な組織体制と活動形態、そして、グローバルとローカルを繋ぎながら住民主体の活動を展開できる NGO をはじめとする市民社会組織であることを再認識している。そして、その市民社会のもつ多様性の力を都市の発展に最大限に生かしていくためには、公共と民間のアクターたちとの一面的ではない多層なつながりによるパートナーシップの構築が欠かせない。そういった意味では、様々なセクターから選りすぐりのスピーカーによって議論が繰り広げられたダイアログセッションは参加していて非常にインスパイアされることが大きなものとなった。

今回の WUF10 で非常に注目していたテーマの一つは、都市における廃棄物マネジメントの課題についてであった。会場 2 日目には、ホストである国連ハビタットの主導により Waste Wise Cities キャンペーンが展開され、廃棄物マネジメントを通じてどう温暖化ガスを減らしていけるのか、雇用の創出と経済の発展の観点からも議論が進められ、廃棄物マネジメントのためのグローバルコミュニティのパートナーシップの強化にもつながり、国連ハビタットのナイロビ本部の担当者の方とも意見交換する機会も持つことができた。会議終了後に、メールで団体が進めている事例について紹介と今後のパートナーシップの可能性についてやり取りを行っているが、ナイロビ最大の廃棄物の集積場でもある団体の活動地、コロゴッチョスラムでの活動がモデル事例と認識され、スケールアップにつながるよう願っている。

サイドイベントでは、ケニア政府インフラ都市開発省主催のセッションにおいて、拡大する都市スラム人口とインフラの整備について行政の考えと今後の方針について、省の事務次官（PS）Mwaura 氏から、直接お話を聞くことができた。ケニアでは、都市スラムの代名詞はキベラスラムと長年認識されていたが、最近のセンサスではキベラスラムの人口は 20 万人をきるところまでいっており、代わって廃棄物放置場所となっているダンドーラ・コロゴッチョスラム地区の人口が 30 万人超にまで迫っていること、それゆえ急務の対策が必要と認識されているが、キャパシティが追い付かないので、NGO の活動と役割に期待したいとお話をいただくことができた。草の根の NGO 団体と省の事務方のトップの直接の対話は、国際会議の場でなければ、成立しない機会であったが、その場だけの話に終わらせず、団体として現地での活動の成果をしっかりとあげることで問題の解決のために政府機関にも引き続きアピールしていかなくてはならないと考えている。

少人数によるトレーニングセッションでは、都市の交通の問題を気候変動の観点から分析し、技術革新がもたらす交通革命について、その成果指標とフレームワークに係る議論と、アフリカの都市から学ぶ文化とイノベーションの融合についてのセッションでは、社会的包摂の観点から、弱者が置き去りにされない都市の開発の在り方について、都市のレジリエンスと復興について興味深い事例を知ることができた。そこで一緒にいた African Real Estate Society の代表の Kariyuki 氏は、都市開発の専門家としてナイロビ大学で教鞭も取られており、都市スラムにおける社会的包摂と文化の多様性について、今後も引き続き意見交換を進めていきたい。

今や世界人口の 4 分の 1 以上を占め、国際社会でもプレゼンスを上げ、注目を集めるユース世代の代表たちによるユースセッションも、WUF10 のテーマを扱う上で非常に重要な役割を占めた。特にアフリカにおいては、ユースの雇用と教育の機会の不均衡の問題は大きな課題となっており、その解決のために政策の

意思決定機関にユースの声をより反映させていくこと、また、社会の若いリーダーとしてユースの持つ能力と可能性を積極的に活用していくことが訴えられていた。世界のユースの代表として、日本からは NPO 法人アクセプト・インターナショナルの永井陽右氏がパネリストとして参加し意見を述べ、ファシリテーターとしては、団体の活動地コロゴッチョの出身で、団体が提携するケニア初のコミュニティラジオ局 Koch FM の創始者でもあり、国連ハビタットのユースアドバイザリーボードでもある Raphael Obonoyo 氏が参加し、都市スラムのユースたちのロールモデルとして多くの希望を与えてくれた。

急激な都市化は、社会の様々な面で、歪みとギャップをもたらしているが、そうしたことに対処していくためには、透明な情報開示と開かれた意思決定機関、そして住民参加型のコミュニティ活動であることが、随所でも述べられていた。活動する地域は違えども類似の課題意識を持ち現場で奮闘する実践者の方たちとの交流は、今後の活動のための大きな資産になった。

3. 考察・提言

3-1. 結論

WUF10 を通じて、加速する都市化の流れは、社会に変化を促す力でもあり、それをどう持続可能な発展へと向かわせるか、社会の様々な場がかじ取りが大切になってきていることを実感している。都市とは、格差や貧困、ジェンダーの不平等や、人権の侵害、環境破壊や、移民といった社会問題の中心としての負の面だけではなく社会の変革を共有するための場でもあり、社会を団結させ、社会変革自体をデザインするための機会でもあることを学び得たことは、都市スラムで活動する団体として勇気づけられモチベーションにつながっている。そして、今回の会合のテーマでもあった「文化とイノベーションの融合」は、都市化の問題を扱う上でも欠かせないソリューションをもたらす一つの解であるということも学んだ。文化は多様性と創造性の源であり、自己を特徴づけるための要素でもあるが、都市化の問題を扱う上で、文化の力を高めていくことはとても重要になる。なぜなら、文化は持続可能な発展の、社会、経済、環境に続く 4 つ目の要素であり、人々をエンパワーメントするためのエッセンスでもあり、公共サービスへの普遍的なアクセスも可能とするものだからである。文化の力で都市を再活性させることは、過度のインフラの供給を抑制し、廃棄物を減らし、移動コストも下げる、つまり、都市の持つネガティブなインパクトを抑える働きがある。そしてそれは、政府や民間だけでなく、市民社会が進める住民参加型のコミュニティのエンゲージメントがあって、はじめて実現可能なものとなる。

グローバルとローカルを繋ぐ市民社会として、私たちは都市化の問題を解決するために、すべての社会のアクターたちに、具体的な行動計画を立てることを求め、各アクターが持つ、確かなデータや知見、そしてアイデアを共有するためのプラットフォームも積極的に形成していかなければならない。垣根を超えた、パートナーシップこそが創造性とイノベーションを起こすための鍵であり、パートナーシップを強化するための触媒となるのが多様性に満ちた市民社会であることを WUF10 の議論を通じて、改めて再認識した。

3-2. 本研修成果の自団体、NGO セクターの組織強化や活動の展開への活用方針・方法

都市化の問題は、一つのセクターで対処できるほど簡単な課題でないことは明らかであり、ダイナミックな協力と行動が求められている。WUF はそのために設けられた場であり、2019 年 12 月に開催された COP25 での決議と内容、地球温暖化の影響からコミュニティを保護するためのパリ協定も反映させながら、幅広い課題への取り組みを促すための知識、経験、リソースの共有を図る場でもあった。都市スラムで様々な課題に直面しながら、持続可能な発展と、脆弱な存在であるコミュニティの女性と子どもたちのエンパワーメントを目指し、教育、健康、環境、経済等の様々な社会開発の視点から問題に取り組んできた弊団体にとって、その知見やアイデアを WUF10 の場で共有し、またショーケースとして示される様々なグッドプラクティスを実践者から直接学ぶ機会を得ることで、団体の活動の発展と、リソースの強化につな

がるネットワーク化を進めることができた。都市化の問題は、増加する人口の問題と合わせて、これからの将来世代が向き合わなくてはならない深刻な社会課題である。WUFで示された模範事例や、議論、そして解決のためのフレームワーク策定のためのワークショップ参加を通じて獲得した知見を、日本の市民社会と広く共有し、団体の活動に効果的なフィードバックも頂きながら、都市スラムでの活動の一層の進展のために生かしていきたい。

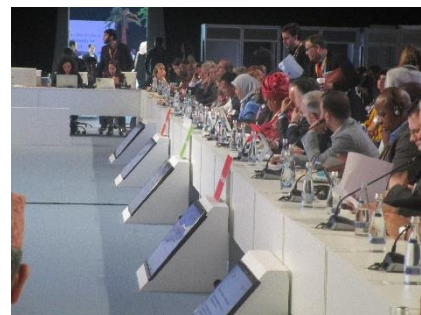
3-3. テーマに関する日本の国際協力分野への提言

世界人口の55%が都市に集中し、都市が異質なものの集まりとなっていく中で、文化の多様性というものが、都市の開発がどう計画され運営されていくべきなのか、その方法論を考える上で重要なキーワードとなってきた。特に今回のWUF10では、「都市における文化とイノベーションの融合」という一見、相反した価値観の結合について様々な角度から議論がなされているが、日本の国際協力の分野でこのテーマが議論されることはあまりないのではないだろうか。その一つにはやはり閉鎖的な移民政策が影響を及ぼしている。移民は、都市におけるグローバリゼーションを考える上で欠かせない要素であり、多文化主義の象徴でもある。残念ながら、移民は日本ではまだまだネガティブな文脈で議論されることが多いが、移民がもたらす文化的多様性は、都市の持続可能な発展のための財産であり、社会経済的便益をもコミュニティにもたらすものである。さらには、資本の創出や、社会の活性化、インフラの発展と雇用の機会を生み出し、社会に変革をもたらすイノベーションの源泉ともなりうる。WUF10で繰り広げられた議論のテーマが、日本の国際協力分野でも活発に議論され、多文化主義が担保された社会が創出され根付いていくよう、文化的多様性を標榜し体现する市民社会はより声をあげていかなくてはならない。

4. 団体としての今後の取り組み方針

WUF10は、多くの知見やアイデアを学ぶだけでなく、世界中から集まる都市化の課題解決の専門家の方たちに、私たちが都市スラムコミュニティで実践している活動を直接知ってもらい、グローバルパートナーシップの強化とリソースの拡充を図るためのまたとない機会でもあった。私たちの団体LBIでは、発足直後から、ナイロビ市のゴミ捨て場から派生したスラムコミュニティ「コロゴッチョ」の環境保全を目標の一つに掲げ活動に取り組んでいる。リソースが脆弱なスラムコミュニティでは、気候変動の影響は、農作物の価格の高騰となって生活に直結して響き、また、中心部を流れるナイロビ川も雨季になると、気候変動による雨量の増加から河川が氾濫しコミュニティの居住区を直撃、避難を強いられる人もでてきている。グローバルの気候変動の課題がローカルレベルでどう具現化し、脅威となってきたのか、WUFの現場の議論でグローバルとローカルをつないだ体験に基づき、WUFで紹介されたフレームワークや知見をローカルの活動で活用するための事業実施計画を策定し、気候変動適応のためのアフリカの都市コミュニティの活動の連携を進めるとともに、アーバンソリューションのアイデアと経験、ネットワークの拡充を目指し、日本の市民社会とSNSや一般公開のセミナーの開催やノーベル平和賞受賞者であり気候変動問題の旗手であるアル・ゴア氏がイニシアティブをとる“クライメート・リアリティ”での発表を通じて広く共有しながら、ローカルからグローバルなムーブメントにも繋げていきたい。

(ユース代表 NPO 法人アクセプト・
インターナショナル 代表永井様と) (ユースセッション)



(ラウンドテーブル)

(SDG s ブロック)



(Waste Wise Cities Campaign)

(オープニング)



(ダイアログセッション)

(ケニア都市開発省ブース)



(SDG s セッション)



(北九州市発表)



(トレーニングセッション)



(ホストの国連ハビタット
事務局長 Dr. Maimunah)

